

令和二年 高志の国文学館常設展特別コレクション展示「翁久允と吉井勇・川田順―富山を訪れた歌人たち」

川田順『高志人』及び『高志』自筆原稿等 翻刻

〔凡例〕

・本文は、令和二年 高志の国文学館常設展特別コレクション展示「翁久允と吉井勇・川田順―富山を訪れた歌人たち」(令和二年六月十九日～令和三年六月)の後期第一期(令和三年一月四日～四月五日)において展示公開する川田順の自筆原稿及び書簡の全文の翻刻を掲載するものである。
・翻刻は、原文の全文を掲載した。本文における用字は、原則として原文のまま表記した。なお、原稿は雑誌『高志人』及び『高志』において既発表であるが、異同等は特に記さなかった。
・本文の番号は、列品番号を付したものである。本展分(イドベール)後期第一期(令和三年一月四日発行)をあわせて参照されたい。
・翻刻に際しては、公益財団法人翁久允財団の須田満氏より懇篤なるご教示を賜った。心より深謝申し上げます。

4 川田順 原稿「仲秋北越行」(『高志人』第七卷第十号、昭和十七年十一月所載)

〔本文〕

校正 特二注意云々

仲秋北越行

川田 順

杉くろき峽に速力にぶくなれり北國街道ここを通るか
今庄の驛にして賣る餡餅は買ひ争ひてたちまちになし
貧しくて橘曙覽をはりにし三十二萬石の城下を通る
すすきの穂列車の窓にふれむとす俱利伽羅峠の隧道を出で
鋸岳の岩巖にしてさらにも一昨日ふりし初雪ひかる
富山の旅館にて、懸廳の小又幸井に
もろともに立山を攀ぢし川田かときはな眺めそ白髪殖えたり

おなじく、高等学校の木俣修に

うたよみの若き教授は酔ひながら北原大人のやまひを憂ふ

翌日

越の國の富山の街に一夜寝て今朝ふる雨は早き時雨か
埋め立てし神通川の川床に擴がる街や時雨ふりつつ

漢谷六郎の家にて

この家の老いたる母のもてなしは神通川の落鮎を焼く
妻子をり老いたる母のをる家のあたたかさには泣かもく思ほゆ

雑誌「高志人」主宰の翁久允に

亜米利加も印度も忘れふるさとの高志人のために執る筆や善し

大岩山日石寺に宿りて

立山ゆおちくる川のたきつ瀬は眞言祕密の寺をとよもす
家持が鑑ぬらしてわたりけむはや延槻川も從此遠からず
並びおつる阿吽の瀧のとどろきにしば寝覺めつつ夜の明けむとす
朝づく日さららに澄みて足引の山の峽より能登の國見ゆ
うすぐらき行場の瀧の岩床の岩に踏みつけて蜈蚣を殺す
住職法壽上人に

ふるさとの古志の山寺に住みつきし高野の僧はいまだ老いせぬ
射水郡小杉町に片口江東翁を訪ひて

故郷にうやまはれつつ老いたるをともしき人と吾がおもふなり
この里に藤井右門が生まれしと今日を来て知る吾がおろかさや

5 川田順 原稿「大伴家持の歌一首」(『高志人』第八卷第一号、昭和十八年一月所載)

〔本文〕

大伴家持の歌一首

川田 順

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く
萬葉集の編者に擬せられる大伴家持は、上代に於いて最もすぐれた歌人の一人である。
柿本人麿に比べては氣宇の劣ること勿論だけれども、山部赤人や山上憶良などよりも小
なりとする定説に對しては、筆者は賛同しない。彼は長歌短歌共に善くした。崇神敬祖
の歌に不朽のものを遺し、嫋々綿々たる戀愛歌に在原業平や和泉式部を魁し、任地越
中にての自然諷詠、例へば、

澁溪をさして吾がゆくこの道に月夜あきてむ馬しまし停め
立山の雪し消らしも延槻の川のわたり瀬あぶみ浸かすも

などに於いては、所謂客観描寫の赤人に優るとも劣らざる力量を示した。かやうに佳作
に富む家持だけれども、聖戦下の今日、増産を喫緊事とする秋に在つては、奥州出金の
歌一首を挙げるのが最も適切だらう。○萬葉集卷第十八、「賀陸奥國出金詔書 歌一
首并短歌」と題して、先づ長歌を掲げ、次に反歌三首、
丈夫の心おもほゆ大君のみことの幸を聞けばたふとみ
大伴の遠つ神祖のおくつきはしるく標建て人の知るべく
すめるぎの御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

を載せ、さうして左註に「天平感寶元年五月十一日於越中国守館大伴宿禰家持作之」と記してゐる。この年、家持は三十二歳の壯者であつた。聖武天皇が東大寺盧舎那佛御建立の最中、金の不足に悩ませ給うた際、天平二十一年二月陸奥國小田郡の鑛山から黄金九百兩を出したので、国守百濟王敬福がこれを朝廷に獻上した。天皇嘉納し給ひ、年號を天平感寶と改められ、四月朔、左大臣橘諸兄を東大寺に勅遣して盧舎那佛の前に詔書を読ましめられ、同時に中務卿石上乙磨をして庶民に詔詞(宣命)を宣聞せしめられた。萬葉集に「出金詔書」とは、諸兄の捧讀した詔書のことである。小田郡金山に関しては和名抄郡郷考に「涌谷村に黄金迫といふ處ありて、皇国に始て黄金の出たる所也といひ傳たり、またそこに黄金宮とて、いとふるき杉どもしげりたる中に、たゞ敷居などのみ残りて有云々、これなん神名帳に小田郡黄金山神社とするされたる、其迹なるべくおもはる」と面白いことが書いてある。家持の歌「東なるみちのく山」とは東国地方なる陸奥の山の意で、上古には現今の関東から奥州のはてまでを廣く「あづま」と総称し、その後、白河関を分界として、此方を「あづま」彼方を「みちのく」と呼ぶならはしとなつた。「くがね」は「こがね」の古語で、萬葉集の他の歌にも「くがねかも多にはあらむ」「しろがねもくがねも玉も」などの例がある。○家持の短歌のついでに、長歌の方にも触れておきたい一事がある。それは、この有名な長歌(賀出金詔書)の中に引用して歌ひ込んだ「海ゆかば」云々の古謡のことだ。前述石上乙磨をして宣聞せしめ給うた詔詞の中に「又大伴佐伯宿禰ハ常モ云ハク、天皇朝守リ仕ヘ奉ル事顧ミナキ人ドモニアレバ、汝達ノ祖ドモノ云ヒケラク、海行カバ水漬ク屍、山行カバ草生ス屍、大君ノ辺ニコソ死ナメ、和ニハ死ナジト、云ヒ来ル人ドモトナモ聞召ス、是以テ遠天皇ノ御代ヲ始メテ、今朕方御代ニ當リテモ、内兵ト思ホシ召シテナモ遣ス、故是以テ、子ハ祖ノ心ナスイシ子ニハ在ルベシ、此心失ハズシテ明キ淨キ心以テ仕ヘ奉レ」といふ御言葉を拝するのである。大伴氏の長者なる家持、これを拝承して、いかでか振ひ立たざらん。詔詞にも明らかなる如く「海ゆかば」の歌謡は、建国のいにしへ、神武天皇の御親兵なる来目部の軍隊が歌つたもので、もちろん家持の作ではない。来目部の総帥にして大伴氏の遠祖なる道臣命(大久米主命に同じ)が作つたのかも知れぬが、それも想像にすぎない。家持の長歌には少々改めて「和には死なじ」を「かへりみはせじ」としてゐるが、愚考によれば、無論、詔詞に引用せられた方が正しいのであるけれども、家持は五七調の長歌に入れる音律の関係上、敢へて改作したのではあるまいか。存疑。○筆者は、昭和十四年九月下旬、今は亡き妻を連れて越中に遊び、萬葉の遺蹟を探つて、國府址・二上山・

射水川・奈呉・布勢水海・澁溪などを一見し、前近十七年仲秋の頃にも再び富山地方に旅して、莊嚴無比なる立山連峰を仰ぎみた。國府の址といふ伏木町大字古國府にては特に家持を偲び、千二百年の昔、大歌人にして壯年の國守なる此の人が、此處で不朽の頌歌を作り、黄金産出の瑞兆を賀し奉つたかと、感慨無量であつた。

6 川田順 原稿「立山を憶ふ」(『高志人』第八卷第二号、昭和十八年二月所載)

〔本文〕

立山を憶ふ

川田順

曾つて吾が寝ねし立山の山岳小屋は十尺の雪の下にかも在る
雪埋む岩のはさまの巢に潜み立山の鷺は眼のみ光らふか
立山の雄山のほこら天に峙ち冰れる巖のかかやくらしも
ぬばたまの黒部の谷の底光り冰らぬ漱々の激ち奔らふ
北山の雪のくだけの飛び来ては我家の庭の土に消につつ
◎校正、特に御注意被下度候(青鉛筆でミセケチ)

7 川田順 翁久允宛書簡「先以て戦捷」(『高志人』第八卷第二号、昭和十八年二月所載)

〔本文〕

高志人社

翁 久允様

一月三日 川田順

拝啓先以て、戦捷の新年御慶申上候、扱本日同封の如く新年試作の手始め致候を、立山の縁によつて、何よりも貴誌へ拝呈いたし候、二月号の余白御割愛被下候は、幸甚に候、「立山を盗む」ほどの作には無之候間何卒御放念被下度候 呵々、

一月号正に拝受、今一部御惠送被下度

御無心申し上候、

草々

8 川田順 原稿「夕陽無限好」(『高志人』第九卷第一号、昭和十九年一月所載)

〔本文〕

「高志人」昭和十八年十一月號所掲の水守龜之助氏稿「萬物靜觀皆自得」といふ小文の中に「小生の所持してゐる藤村の書は夕陽無限好・唯是黄昏路といふのです。栗本鋤雲の文中にあつたものださうです」云々とあつた。すると同誌十二月號に、これに関連して小島鳥水氏の一文出で、小島氏は早速鋤雲の匏庵遺稿を調べたところ、「昨今は天氣豫報も餘り當てにせず、唯家に在りて、晴るれば夕陽無限好・唯是近黄昏と、曾て熊谷武五郎氏の誦せし古句を思ひ出し」云々とあり、藤村の書と小違がある、藤村の記憶違ひか、或は改削か、と述べてゐる。僕は水守・小島両氏の文章に興味を感じ、敢て蛇足を加へたくなつた。

四年前の丁度今日（小書「十二月六日」）僕は荊妻かすこ和子と共に薩南笠沙岬さつなんかささに佇たつて夕陽を拜したが、間もなく妻が急歿したので、手向のため、隨筆集「夕陽と妻」を公けにした。尋いで六甲山麓の山海居を引拂ひ、洛北の小庵に閑居したが、この小庵は新村出博士によつて「夕陽居」と命名せられた。夕陽と僕との關係はかくの如く深い。

島崎藤村先生ほどの大詩人が書かれたのだから間違ひでは無からうと愚考するけれども、詩としては唯是近黄昏であらねばならぬかと思ふ。唐宋の古句をざつと調べたけれども、あいにく此の原作が見當らないので、確かなことは言ひ得ない。或は邦人の作かとも考へ、懷風藻や倭漢朗詠集を披き、江戸時代の詩人の選集などをも一見したけれども、やはり見當らなかつた。小島氏と同様に、僕も亦、誰か知つてゐる人に教へていただきたいと思ふ。

「夕陽」の詩句を調べたついでに（調べたと申しても、實は漢詩大觀の索引の御厄介になつただけではあるが）僕の氣に入つた句を少々挙げて見よう。

陸放翁に夕陽下馬弔荒陵とあるのは、必ずしも新鮮ではないが、情景一致の佳句にちがひあるまい。王安石の午梵隔雲知夕寺・夕陽歸去不逢僧は、唐詩の百花深處一僧歸に劣るかな。西上太白峯・夕陽窮登攀・太白與我語・為我開天闕は、李白例に依つて鬼面を被り赤子を威すに過ぎざるものか否か。どうも立派なだけで、親しみ難い。又も陸放翁だが、夕陽更有蕭然處・照影清溪整葛巾は申分ない。能因法師も「足引の山下水に影見れば眉しろたへにわれ老ひにけり」と歌つた。黄山谷の歸來坐虛室・夕陽在吾西は渋いものだ。夕陽が吾が東に在つてたまるものかなどと、屁理屈をいふ人間に詩はわからない。白樂天の朝露貪名利・夕陽憂子孫は少々耳が痛いけれども、人情の有りの儘を出

してゐるので、傾聴に値する。ゆめ／＼白俗などと暴言を吐くものでない。人生を知らず、嘴の黄いろい小僧共は、白詩は平俗なり、常識的などと、生意氣なことをぬかす。法に外づれた奇抜な文句を並べるのが詩だと考へる方が、餘程の俗物なのだ。さやうの小僧共には、人間の本当の聲は通じない。ついでに邦人の漢詩を見ると、森田臥牛の夕陽城外樹・芳草水辺村とか、廣瀬旭莊の飛雨霞外霽・夕陽海面均とか、長三洲の天未沒孤鴻・夕陽明滅中とか、鱸松塘の夕陽人未歸・雲影入虛室とかあるけれども、唐宋からこれ等に移ると、萬葉集から古今集に目を轉じたやうなものだ。と申しても、夕陽無限好の佳句は案外邦人の作かも知れない。邦人元來器用なるが故に、往々にして出藍の技を示す。

僕は、無類の悪筆なるにも関はず、近來時として半折を書いたり、頗る稀には額面の揮毫をしたりする。實に柄に無いことだが、強要されるので已むを得ない。それで先日、谷崎潤一郎氏の紹介で來宅した威徳流宗家筆司某といふ老人から、太い筆一本、大金を出して買った。又、額面の場合に必要不可欠と忠告した友人があつたので、鶏血石とか稱する変手古なものを印材にして、落款用の文字を彫らせた。順之印と、それから夕陽居といふ二箇の四角な奴は出來たが、なんでも右の肩に捺すといふ細長い奴、閑防とかいふ奴に刻るべき名文句が見付からぬので、その儘にして置いた。丁度仕合せなことには夕陽無限好といふ無限の佳句を教へられたので、早速、閑防には無限好と彫らせることに決める。さうして、目下、薩南笠沙の鍊成道場から催促されてゐる額面の揮毫に、先づ無限好の關防を捺してやらう。これも、故島崎先生と水守氏との賜物である。

—昭和一八・一二・六

10 川田順 原稿「夕陽と妻」に就いて（『高志』第一卷第二号 昭和十九年六月所載）

〔本文〕

「夕陽と妻」に就いて

川田 順

「夕陽と妻」は、亡妻を記念せんがため、彼女歿後十箇月を経た昭和十五年十月、甲島書林から發行してもらつた隨筆集であるが、この一卷はこれまでの間に僕の書いた散文の中では、最も自信のあるものと云つて差支ない。深き悲しみと愛とを籠めたものなるが故だ。發行後、未知の數人から、これに関する同情の深い手紙をもらつた。最近にも樺太大泊郡知床村の中知床岬燈臺と宿所を書いた原正男といふ人から「あの隨筆集が残つてゐるならば、是非一冊送つて下さい」と申込んで來た。按ふに、この北辺の燈臺守

も妻を失つた人であらう。

ところが今日又、松本仁・山西敏郎・秋山楓粹三君連名の書簡をもらたが、三君とも歌壇の人々で、僕と相識の間柄ではある。さてその書簡の大意は次の如し。

二月十三日のこと、洛東法然院の山門近くに獨棲して久しき松本君を慰めるべく、山西・秋山西君が訪問し、僅か二壘の酒を舐めながら夜を徹して語りあつた。深更、書棚から「夕陽と妻」を取出し、三人してかはるゝ讀んだ。秋山君は、ところゝゝを朗誦した。「月愛三昧」の章を誦した時には、秋山君は鼻をつまらせ、他の二君は涙を流した。さうして、三人はそれゝゝの妻に對する懺悔の文章を書かねばならぬと發心した。朝明けて見ると、一めに淨らかな雪の世界であつた。

ざつと右の如き手紙だが、僕は感激した。僕がこの隨筆集を公けにした動機は、もとより亡妻への回向のつもりであつたが、又一つには、世間の人々に對し、配偶者を大切にしたまへ、とり返しのつかぬ後悔する勿れ、といふ忠告のつもりでもあつた。僕は夫として落第でもないが、満點でもなかつた。妻に死なれて、はじめていろゝと後悔もしてゐる。もしも僕の懺悔的隨筆によつて、妻を大切にしようと思心する人が世間に幾人かでもあつたならば、僕の亡妻に對して無上の供華ともなるであらう。かやうに考へてゐる僕は、三君が「それゝゝの妻に對して」一文を草しようと悲願せられたことは、涙ぐましいほど忝い。

今日といふ今日、僕はたまゝ西行の「聞書殘集」を披いて、洛西常盤堂に於ける秋夜清興のところを讀んだ。西行・西住・寂念・靜空・寂昭などいふ世捨人が會合し、初夜の程は雨しとくと降つたが、やがて月光が淨らかに輝いた。彼等は「後の世のものがたり」などして東天の明けて来るのを知らなかつた。この古き歌集を讀んでゐたところへ、三君連名の手紙の届いたのも不思議だ。それは七百数十年前の洛西のこと、これは一兩日前の洛東のこと。それは月明の夜、これは雪を催す餘寒の夜のこと。それは黒衣の僧共の會、これは壯年の歌よみ達の集り。さうして話題は、一は往生安樂のこと、他は此の世に於ける配偶者への哀慕のこと。かやうに異なるけれども、何かしら共通のものを藏してゐる。

僕は、三君からの書簡を一讀した後、佛壇に供へた。

昭和十九年二月稿

〔本文〕

特別攻撃隊領 昨年十一月末より本年正月に亘りて朝日新聞に連載

川田順

神風の名におふ子らはみづからのいのちを幣と奉りつつ
靖國の宮の鳥居を明日もかも黙くぐらむと言ひ遺しける
草生すも水漬くも國のためながら爆ぜて残らぬ屍は淨し
弓弦を放れたる箭のごとくにも生身は飛びて敵刺しとほす
死ぬる道われもわれも行く見ればみな若くしてみな潔し

13 川田順 翁久允宛書簡「寄翁久允学兄」(昭和二十年七月二十三日消印)

〔本文〕

(封筒表)

(転居票) 雄山局行 受取人左記へ轉居ス 7月24日 富山郵便局集配員

五百石町 石原志げ方

消印「□ 7 23」 押印・書き入れ「速達」

(封筒裏)

七月廿二日 京都市北白川小倉町

川田 順

(便箋)

寄翁久允学兄

亞米利加も印度も見たる君なればいまの戦争の行方を知らむ

亞米利加ゆ歸らふ途にみほとけの足跡たどり泣きし君かも

高志の国を狭しと思ふなこの時ぞふるさと人のために筆執れ

昭和乙酉晩夏 夕陽居主人(朱文方印)「順」

・本紙の内容には一部今日では不適切と思われる表現がありますが、当時の時代状況に鑑み、また、作者の表現を尊重する観点から、原文のままとしました。

・著作権等については調査を努めましたがお気づきのことがございましたらお知らせください。

令和二年一月四日 高志の国文学館(富山県富山市舟橋南町二二二)